慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「青池ゼミ」で学んだこと
Sub Title	
Author	河野, 一郎(Kōno, Ichirō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.10- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「青池ゼミ」で学んだこと

河野　一郎

「なんだか背が高くて格好いいなぁ。しかも、優しそう……」

40 年ほど前、大学２年生だった自分が、初めて青池先生の講義、『原典講読』を受けた時の印象です。当時、日吉から三田に移って社会学専攻に進んだ者たちの間には、「青池ゼミ」の厳しさが鳴り響いていました。そのため、講義を受ける前は、さぞ怖い先生に違いないと身構えていたのです。

予想は見事に外れました。英語の論文に戸惑う自分たちにも丁寧なレクチャーを繰り返し、さらに講義終了後には、やる気のある生徒を集めて特別指導まで行ってくれる。3 年になったら、絶対に青池ゼミに入ろうと決意しました。

ところが、それからが大変です。青池ゼミには入ゼミ試験がある上に、面接までである。まるで会社の入社試験です。面接では先輩たちから遠慮のない質問が飛んできて、これもプレッシャーでした。

さらにゼミに入ると、今度は軽井沢で行われる「地獄の春合宿」が待っています。徹夜当たり前の課題が出され、徹底的にしごかれる。こうした関門を乗り越え、やっと青ゼミ生になるという感じでした。

振り返ってみると青池先生は、ゼミの活動を通じて、教え子たちを社会で通用する大人に育てようとしていたのだと思います。

まずは学生に、面接や春合宿といった通過儀礼を体験させ、ゼミ生としての自覚を促す。その上で、ゼミ長、副ゼミ長、統制部長の三役を中心に、学生たちの手でゼミを自主運営させる。春合宿や夏合宿はもちろん、ＯＢ・ＯＧ会の企画や運営も、すべてゼミ生が役割分担して行っていました。自分たちで考え、自分たちで動く。この教えは一貫していました。

また青池ゼミでは、チームに分かれて調査や研究を行うグループ研という取り組みがあったのですが、発表会で先生から「ダメ出し」があると、再レポート提出の決まりがありました。再レポになると、もう一度、何か月もかけて研究をやり直さなければなりません。そのため、何としても合格しようと、メンバー全員が知恵を出し合い、協力しながら必死で頑張るようになります。

こうした経験が糧となるのです。社会人となり、チームを組んで企画立案やプレゼンを行うようになると、「これって青ゼミのグループ研と同じだなぁ」と思うのです。青池ゼミは就職に強いと評判でしたが、その所以だったような気がします。

あの頃、青池先生は40代前半で、まだお酒もお好きでした。ゼミが終わると、統制部長を中心に、先輩、後輩みんなで飲みに繰り出します。1 次会が終わると、2 次会では仲通り商店街にあった「コマ」というスナックに顔を出すのが定番でした。ウイスキーを飲みながら、他学部の先生や会社勤めの先輩たちと歓談する。時にカラオケで、青池先生が裕次郎や昭和歌謡を熱唱することもありました。

そうした飲み会でのコミュニケーションも、社会人としての常識やマナーを身に着ける基礎となった気がします。

青池先生は常々、「自分には子供がいないので、君たちゼミ生が私の子供です」と、おっしゃっていました。故に、ゼミ生を一人前の大人に育てるんだという意識が強かったのだと

河野一郎「「青池ゼミ」で学んだこと」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）10-11 頁

思います。青池先生は何十年も前のゼミ生とのやり取りをこと細かに覚えており、ゼミ生の今についても常に気にされていました。

自分は卒業後も先生とお会いする機会が多かったのですが、いつも仕事は上手くいっているか、健康は大丈夫かと心配してくださいました。自分は先生と同じ北海道の出身なのですが、青池先生はまさに、「東京の父」といえる存在だったように思います。

先日たまたま、入社した時に会社に提出した書類に目を通す機会がありました。懐かしいなと思いながら読んでいると、一番下に身元引受人がサインをする欄がありました。何十年も前のことで、どなたにお願いしたのか、まったく覚えていませんでした。

そこには、見覚えのある丁寧な字で、「青池愼一」と署名がありました。

三田の研究室。笑顔でサインをしてくださった青池先生……。記憶が一気に甦ってきました。

＊

天国の青池先生、この場をお借りして御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

（こうの　いちろう　文藝春秋）